

# 大瀬川館遺跡と柳田館遺跡出土の陶磁器について

笠原雅史

# 大瀬川館遺跡と柳田館遺跡出土の陶磁器について

笠原雅史

岩手県立博物館 020-0120 盛岡市上田字松屋敷34 Iwate Prefectural Museum, Morioka 020-0120, Japan.

## 1 はじめに

今回取り上げる2遺跡は東北縦貫自動車道建設に係り、岩手県教育委員会が主体となり実施したものである。<sup>(註1,2)</sup> その出土品の一部は、所有者から借り受け、当館で展示されている。しかし、30年以上前の年代観をもとに調査報告書が作成され、その後再整理が行われていない。今回は現代の年代観をもとに、これらの遺跡から出土した陶器及び磁器について再整理を行った。これをもとに、当時の交易について若干の考察を行うこととする。

## 2 大瀬川館遺跡と柳田館遺跡

### (1) 大瀬川館遺跡

本遺跡の発掘調査は、昭和49年に実施された。報告書では大瀬川C遺跡と記載されている。石鳥谷町中心部の西方、奥羽山脈の山中から葛丸川の上・中流域の平野部を含み、盛岡方面へ抜ける旧街道が南北に通っていたという。北は斯波郡と境を接しているため、稗貫氏の時代は領内の北西端にあっていたと思われる。今回比較する柳田館との位置関係は次頁の図のとおりである。2遺跡は直線距離で約3km離れている。館跡は里森山から伸びた丘陵の東にあり、標高は178mである。空堀と土塁に囲まれた5つの郭からなり、東西300m、南北400m規模を持つ。もっとも大きい一の郭には、登り道2か所と門跡、建物を仕切る溝跡、掘立柱建物跡47棟、竪穴式建物跡6棟、井戸跡などが見つかっている。規模の大きな主屋と思われる建物は郭の北西に集中し板葺か茅葺の建物であったと推定されている。主屋に付属して、倉庫・厩・作業場などと考えられる小規模の建物跡や、カマド状の焼土遺構や井戸跡も発見された。二の郭、三の郭からも掘立柱建物跡や竪穴式建物跡などが検出されているがいずれも規模が小さい。堀の形状は全て底がV字型の薬研堀である。出土した遺物は陶磁器類の他、鉄鎌、小刀などの武具、鍋・石臼などの調理具木材類、古銭。

穀物類などがあるが、生活用具が多く、日常生活の場でもあったことが分かる。山城としては稗貫氏領内で最も規模が大きい<sup>(註3)</sup>。

瀬川氏の祖は、源頼朝の重臣畠山重忠の子孫と思われる、多くの文献に記録されている。その館は「館山」と呼ばれている標高170mの小山にある。「瀬川城」「大瀬川館」「古館」などともいう。『内史略』『稗貫郡旧記』には次のように記されている。<sup>(註4)</sup>

### 大瀬川古城跡

則大瀬川村に有 当領主は畠山次郎重忠の末孫也と雖村老の口碑に残れるのみ(中略)考ふるに是則瀬川氏は此人の子孫たるへし 然といへ共 重忠の領奥州葛が岡にも有りといへれば 此地に居する処 一子を設け此地を領せしや考ふべし往稗貫世に有し頃 此城を以斯波家の押さへとすと云々 天正晩年の頃の領主を瀬川隠岐守と云 今其末多く御家に仕ふと云々<sup>(註4)</sup>

この畠山氏の子孫重行が稗貫郡に下って「大瀬川殿」と称したのが、瀬川氏の祖となったという。<sup>(註5)</sup> また、『内史略』『稗貫郡旧記』の小瀬川古城跡の項に次のような記述が見られる。

### 小瀬川古城跡

小瀬川村に有 伝云 往昔大瀬川の領主居住せしと云 村老いへるは 此は則稗貫殿の祖 山内氏当郡を領するの初 此地に城を築き居住せしは這なりと云<sup>(註4)</sup>

大瀬川館の領主が、それより以前に小瀬川城に居住し、そののちに大瀬川館へと遷ったとする伝承についての記述が見られる。他の史料と合せ、最初の小瀬川城から大瀬川城、そして十八ヶ崎城(鳥谷ヶ崎城と変遷したという説があるという。大瀬川城から鳥谷ヶ崎



図 柳田館遺跡 (1) と大瀬川館遺跡 (2) の位置関係

城への移転を16世紀中ごろの享禄または永禄年間とする見方もある。<sup>(註6)</sup>

以上のように、文献資料だけでは大瀬川館遺跡の中心的な年代については定まった年代観がない。

## (2) 柳田館遺跡

柳田館遺跡の発掘調査は、昭和50年、昭和51の二次にわたり実施された。遺跡は紫波郡紫波町方寄字中平に位置する。昭和30年の町村合併により旧志和村より紫波町へ編入され、紫波町南西部にあたる。南に稗貫郡石鳥谷町、西は岩手郡雫石町に接する。標高218～174mの緩やかな東斜面をなし、調査時の遺跡の状況は針葉樹林を主とする山林であった。遺跡付近の集落は、弧状に湾曲する段丘東辺に沿ってほぼ南北に発達し、主に県道以西の高位段丘に形成され、西方は山王海幹線水路に重複する古道「安倍道」以東に限られている。この間東西1kmに及び、さらに両道に沿って二分される。遺跡の北東より大沢尻、中平、鶴森、大明神と連なり、古町や下野の屋号は安倍道沿いに伝えられている。南は稗貫郡の境であり、大瀬川C遺跡とは斯波氏と稗貫氏の境をはさむ関係にある。

紫波地方における城館は、明確な遺構の判明していないものを含めて71遺跡を数えるが、伝承される館社や文献に記される館城については比定できない例が

ある。柳田館は従来「吉兵衛館」、あるいは「中野館」と伝承され、柳田館の名称は所有者の屋号により、「柳田」所有の館跡として故障されるものである。旧片寄村を含む柳田館について知ることができる史料は極めて少なく、古くは藤原氏時代に樋爪氏の支配下にあると推定されるものの明らかではなく、「片寄」の所見は斯波氏時代末期に至ってからである。寛文4年(1664)片寄村は南部藩分割に伴い八戸藩の飛地となる。寛文2年(1662)～明和6年(1769)の年代記により、八戸領下にあつて廃城であることが知られる。

## 3 出土資料について

### (1) 大瀬川館遺跡に陶磁器類

発掘報告書によると、大瀬川館遺跡出土陶磁器は、青磁30、白磁63、青花104、赤絵3、その他8、灰釉陶器65、鉄釉陶器8、その他陶器10、土師質土器24、須恵器2、土師器5、弥生土器35、縄文土器55の計412点である。(うち陶磁器291点)陶磁器を中心にこれらを実見し、再整理を行い、種別にまとめると以下の表2のとおりとなった。なお、資料数は個体数ではなく、単純に破片数を数えた。なお、青花については中国産のものは「青花」、国産のものは「染付」と記した。

表1 大瀬川館遺跡出土の陶磁器（再整理）

器種	器形	分類	年代	産地	数	備考
灰釉陶器	皿	大窯1前	1480頃～1500頃	大窯	12	端反皿、丸皿、稜花皿
灰釉陶器	皿	大窯1後	1500頃～1530頃	大窯	1	(前期に加え)反り皿
灰釉陶器	皿	大窯2前	1530頃～1545頃	大窯	10	端反皿 丸皿 稜皿
灰釉陶器	皿	大窯2後	1545頃～1560頃	大窯	45	丸皿 稜皿 反り皿
灰釉陶器	皿	大窯1後～2前	1500頃～1545頃	大窯	15	
灰釉陶器	皿	不明	不明	大窯	13	
青花	碗	碗B群	14C末～15C中	明	13	端反 唐草文
青花	碗	碗C群	15C後半～	明	15	芭蕉葉文 蓮子文
青花	碗	碗C群かE群	15C後半～	明	2	アラベスク波濤帯文
青花	碗	碗E群	16C中～	明	4	四方櫛文 牡丹唐草
青花	皿	皿B1群	15C後半～	明	34	唐草文 十文字 玉取獅子
青花	皿	皿C群	15C後半～	明	9	碁笥底 波濤帯文等
青花	皿	皿E群	16C末～	明	3	花鳥折枝 山水人物 蚊龍
青花	不明	不明	不明	明	19	
染付	不明	不明	不明	不明	7	
染付	碗		17C～	肥前	2	
染付	碗		19C～	不明	7	
青磁	碗	A類	13C	元	1	細長い蓮弁
青磁	碗	B類	14C中	元/明	1	蓮弁
青磁	碗	C類	15C末～16C初	明	7	便化した雷文
青磁	皿	稜花皿	15C	明	17	
青磁	不明	不明	不明	明	7	
赤絵	皿		16C	明	3	
陶器	碗		16C	大堀相馬	5	
鉄釉陶器	天目	大窯2	1530～1560	大窯	5	壺 水注 天目
鉄釉陶器	天目	天目茶碗		明か	1	
白磁	皿	E19	15C末～16C初	明	1	
白磁	皿	E20	15C末～16C初	明	4	
白磁	皿	E22	15C	明	1	
白磁	皿	E25	15C	明	2	
白磁	皿	E26	15C末～16C初	明	7	
白磁	皿	E27	16C	明	40	
白磁	碗	E29	15C末～16C初	明	13	
白磁	碗	E30	16C	明	3	
白磁	碗		17C	肥前	2	
白磁	盤		18C	肥前か	1	
白磁	瓶子		不明	明か	1	
不明	不明				3	

(2) 柳田館遺跡出土の陶磁器

発掘報告書によると、柳田館遺跡から出土した陶磁器類は、発掘報告書によると、青磁 137、白磁 220、青花 478、灰釉陶器 398、鉄釉陶器 29、施釉陶器 102、常滑系瓷器系陶器 7 の計 1371 点である。大瀬川館遺跡の場合と同様に陶片数を数えた。なお、柳田館出土の陶器、磁器については、報告書を元に飯村均氏が既に整理調査を行い中国（朝鮮）当時は 310、瀬戸・美濃系は 254 としている。<sup>(註7)</sup> 今回の整理調査の結果は次頁の表 2 のとおりである。

4 2 遺跡の出土陶磁器の比較

2 遺跡の出土陶磁器の出土陶磁資料の点数を比較すると、大瀬川館遺跡においては中国産青花が 31.7%

で最多である。これに次ぐのが大窯産灰釉陶器で 28.5% を占め、以下中国産白磁 17.6%、中国産青磁 12.7% が続く。これに対し、柳田館遺跡においては、大窯産灰釉陶器が 30.9% と最も高い割合を占め、中国産青花が 22.5%、中国産白磁が 14.1%、中国産青磁が 11% である。各資料の年代を見ると、大瀬川館遺跡は 15 世紀後～16 世紀初めの出土資料が最も多く、44.4% を占め、16 世紀は 41.1% である。つまり、15 世紀末～16 世紀の出土陶器で 80% 以上を占めることになる。一方の柳田館遺跡も、やはり 15 世紀後半～16 世紀初めの資料が最多で 37.5% を占めるが、その割合は大瀬川館遺跡と比較して低く、15 世紀は次に続き 26.2%、16 世紀のものは 15 世紀とほぼ同数の 26.1% となる。柳田館遺跡の出土資料の点数は、



表 2 柳田館遺跡出土の陶磁器（再整理）

器種	器形	分類	年代	産地	数	備考
灰釉陶器	皿	古瀬戸	～1480	大窯	1	
灰釉陶器	皿	大窯1前	1480頃～1500頃	大窯	51	端反皿、丸皿、稜花皿、灯明皿
灰釉陶器	皿	大窯1後	1500頃～1530頃	大窯	95	(前期に加え) 反り皿
灰釉陶器	皿	大窯2前	1530頃～1545頃	大窯	29	端反皿 丸皿 稜皿
灰釉陶器	皿	大窯2後	1545頃～1560頃	大窯	50	丸皿 稜皿 反り皿
灰釉陶器	皿	大窯3～4	1560頃～1600頃	大窯	7	稜皿
灰釉陶器	碗	大窯	不明	大窯	7	丸碗
灰釉陶器	皿	不明	不明	大窯	156	
鉄釉陶器	碗	大窯2～3期	1530頃～1590頃	大窯	1	
鉄釉陶器	碗	大窯3～4期	1560頃～1600頃	大窯	5	
鉄釉陶器	天目	大窯3期	1560頃～1590頃	大窯	16	
鉄釉陶器	天目	不明	不明	明	4	
陶器	すり鉢	不明	中世か	不明	9	
陶器	不明	不明	近世か	不明	3	
陶器	不明	不明	不明	不明	5	東北在地産を含むか
陶器	不明	不明	不明	信楽か常滑	4	
陶器	碗	不明	17C	大堀相馬	57	
青花	碗	碗B群	14C末～15C中	明	14	端反 唐草文
青花	碗	碗C群	15C後半～	明	56	芭蕉葉文 蓮子文
青花	碗	碗D群	15C後半～	明	21	アラベスク波濤帯文
青花	碗	碗E群	16C中～	明	12	四方櫛文 牡丹唐草
青花	皿	皿B1群	15C後半～	明	45	十文字 玉取獅子
青花	皿	皿B2群	16C中頃～	明	18	端反 四方櫛文
青花	皿	皿C群	15C後半～	明	35	碁笥底 波濤帯文等
青花	皿	皿E群	16C末～	明	8	花鳥折枝 山水人物
青花	不明	不明	15～16C	明	180	小片のため判別困難
染付	碗	不明	17C	肥前	27	
染付	碗	不明	19C～	不明	64	
青磁	碗	A類	13C	元	1	細長い蓮弁
青磁	碗	B類	13C	元	1	鎬蓮弁
青磁	碗	B類	14C末～15C初	明	11	
青磁	碗	B	15C中	明	29	
青磁	碗	B	15C末～16C初	明	10	
青磁	碗	B	16C中	明	2	
青磁	碗	C	14C中	元/明	2	高台断面四角形
青磁	碗	C	14C末～15C初	明	1	口縁部雷文 玉縁
青磁	碗	C	15C末～16C初	明	24	便化した雷文
青磁	皿	稜花皿	15C	明	32	
青磁	皿		15C	明	4	
青磁	盤	不明	14C	明	2	
青磁	不明	不明	不明	中国	40	
白磁	皿	C18	15C後半	明	8	
白磁	皿	E20	15C～16C	明	9	
白磁	皿	E22	15C末	明	2	
白磁	皿	E23	15C～16C	明	3	
白磁	皿	E26	15～16C	明	17	
白磁	皿	E27	16C	明	3	
白磁	皿	E29	15C～16C	明	15	
白磁	碗	E30	16C	明	18	
白磁	碗	不明	不明	明	126	

15世紀から16世紀の資料の割合は大きく変わらない。大瀬川館遺跡における15世紀の出土点数、割合は柳田館遺跡のそれらを大きく下回る。一概にはこれらが遺跡の中心年代を示すものとはいえないが、柳田館遺跡の方が長期間使用された可能性が高い。

## 5 考察 一出土資料からみる交易のようす

前章で述べたとおり、各種類の陶磁器の全出土陶磁器に占める割合は相互に異なるが、主要な組成には共通点が見られる。

特に目立つのは、大窯産の灰釉陶器、中国産染付、中国産白磁、そして中国産青磁である。まず、灰釉陶

器に注目すると、大瀬川館遺跡においては、大窯1期(1480～1530年)は13.5%、大窯2期(1530～1560年)は57.3%を占め、この時期の出土資料で8割以上を超える。一方、柳田館遺跡の出土資料は細片が多く、156片の時期の判別を付けることができなかった。これらを除いた全資料のうちの割合は大窯1が最多で62.7%、大窯2が33.9%を占めた。少量ながら、古瀬戸の範疇に含まれる可能性があるものが0.4%、大窯3～4期(1560～1610年)のものも3.0%である。

藤澤良祐氏により、織田信長が安土城下を楽土化する第3段階後半以前は、大窯製品の生産窯は、その出土分布から、第1期から見られる瀬戸窯(瀬戸・上水野・品野)、藤岡窯(三河)、美濃窯や第2期に新たに構築される赤津・下半田川地区(瀬戸窯)、笠原・滝呂・柿野・細野・土岐口地区など土岐川以南の中央部の集落に分布する事が指摘されている<sup>(註7)</sup>。

大瀬川館遺跡と柳田館遺跡出土の第1～2期の大窯製品はこれらの窯のいずれかで焼かれ、次の2つのルートで運ばれたと想定できる。伊勢山田の商人によって大湊から海上輸送され、東海地方東部や南関東へともたらされたルートと、もう一つは近江の湖東地方へは保内商人により伊勢桑名から鈴鹿山脈を超える陸路で運ばれ、そこからは大窯製品の出土分布から天目茶碗と小皿類がセットで北陸地方さらに北東日本海域へと移送されるルートである。藤澤氏は、「畿内への搬入については近江からと、伊勢から熊野灘を超えての海路も想定する必要がある」と指摘している。

明(1368～1644)からの舶載陶磁器についても同様に北東日本海域、南関東、そして畿内については大窯製品と同様か、それに類似したルートで運ばれたものと考えて良いと考える。東北中部・北部の太平洋海域の交易路については、日本海側においては外ヶ浜、太平洋側では石巻から平泉へ搬入されたと考える説があるが、明瞭になっていない。釜石市川原遺跡から珠洲産の陶器や鎬蓮弁の青磁が出土していることから<sup>(註8)</sup>、太平洋から三陸沿岸への搬入ルートの存在も十分可能性として考えられるが、十分な資料がそろっていない。調査で得られた確証ある資料を元に、今後とも考察を深めていきたい。

## 謝辞

本稿をまとめるにあたり、ご助言をいただきました杉沢昭太郎氏、羽柴直人氏に厚く御礼申し上げます。

## 註

- 註1 『岩手県文化財調査報告書第57集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-VIII-(大瀬川A～C遺跡)』1981年3月岩手県教育委員会 日本道路公団
- 註2 『岩手県文化財調査報告書第53集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-IV-(柳田館遺跡)』1980年3月岩手県教育委員会 日本道路公団
- 註3 『稗貫氏探訪 稗貫氏八百年顕彰記念誌』稗貫氏八百年記念事業実行委員会 1995年
- 註4 「稗貫郡旧記」(『岩手史叢 第一巻内史畧(1)』岩手県文化財愛護協会発行 1973年)
- 註5 石鳥谷町史編纂委員会『石鳥谷町史 上巻』1979年
- 註6 小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその時代」(『貿易陶磁研究 NO.2』日本貿易陶磁研究会 1982年)
- 註7 藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通-研究の現状と課題-」(『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立10周年記念「瀬戸大窯とその時代」シンポジウム・講演会 戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品-東アジア的視野から-資料集』2001 財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター)
- 註8 『釜石市埋蔵文化財調査報告書 第5集 川原遺跡発掘調査報告書 市道鶴住居64号線建設に伴う発掘調査』釜石市教育委員会 2004年3月

## 要旨

1970年代に発掘調査が行われた大瀬川遺跡、柳田館遺跡の両遺跡から出土した陶磁器について再整理を行った。その結果、文献史料が乏しい2遺跡の中心の年代が15～16世紀であり、大瀬川館遺跡遺跡と比較し、柳田館遺跡の使用時期がより年代が遡り、より長期に使用された可能性が高いことが分かり、中世の東北地方の交易の実態を考察する一資料として紹介した。

キーワード：大瀬川館、柳田館、陶磁器、中世城館、交易



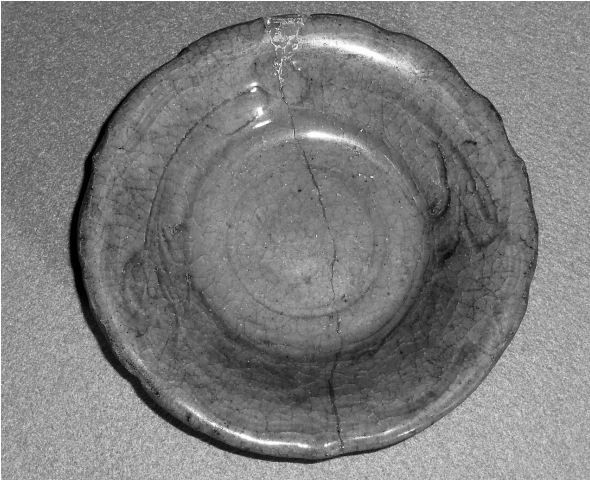


写真1 青磁 稜花皿 明 15世紀  
大瀬川館遺跡出土



写真2 青花 碗C類 明 15世紀後半  
大瀬川館遺跡出土

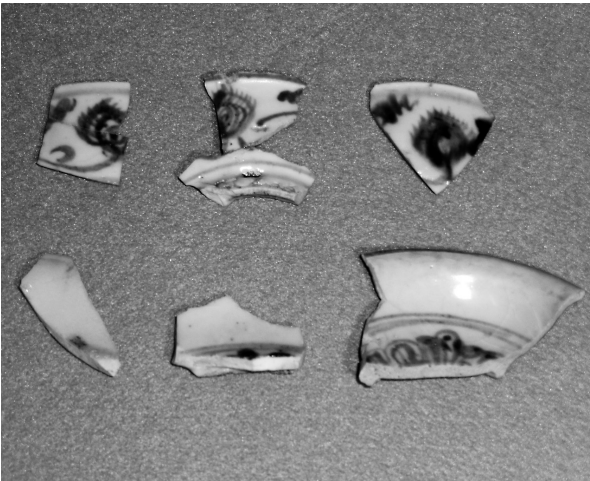


写真3 青花 皿B類 明 15世紀後半  
大瀬川館遺跡出土



写真4 白磁 碗E30類 明 16世紀  
大瀬川館遺跡出土

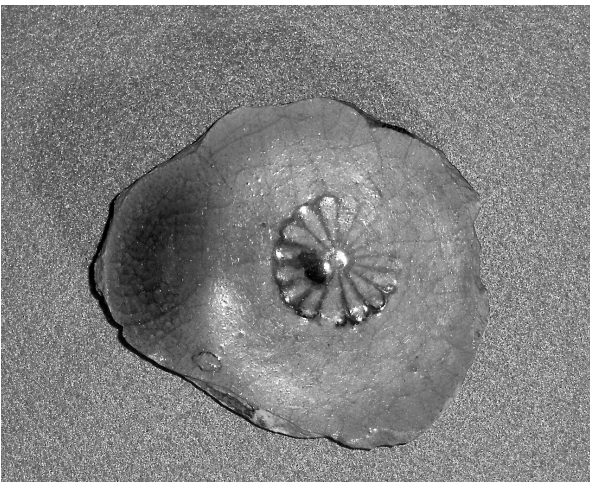


写真5 灰釉陶器 皿 大窯 大窯Ⅱ期(1530年頃～  
1560年頃) 柳田館遺跡出土



写真6 赤絵皿 明 16世紀 大瀬川館遺跡出土